

紙つて

命がけの修行で道を開いた剣豪宮本武蔵は「万事において我に師匠なし」とした。凡人はそうはいかない。思い起こせば、多くの師に導かれてきた。「教えられた」というより、生きる道を「訓えられた」感がある。

京都大では有機化学の手ほどきを受けた。「研究内容は『縦書きの日本語』で簡潔に表現すべし」が恩師野崎一教授の訓え。「横書き」かつ片仮名の「外来専門用語」がたくさん入る研究題目では、専門家しか理解できない。それではどうてい影響力ある一級の科学者たり得ない、と納得した。学術論文はもちろん英語で発表した。

二十九歳の世間知らずで、名古屋大で研究室を主宰した。後見人は天然物有機化学の巨人、

野依 良治

我に師あり

平田義正教授。筋金入りの実験主義者の研究哲学は「他人がやれることはやらない、答えがあるとわかっているものはやらない」。私への要請はただ「名古屋の有機化学を良くしてほしい」。目標は高かった。

目を見張ったのは、病床にいた坂田昌一理学部長の後継者、早川幸男教授。「物理帝国主義」を超えた柔

軟思考の宇宙物理学者。さっそうたる振る舞いには「天性の指揮官」の名がふさわしい。パイプをくわえながら、常に笑顔で座の中心にいた。大局を踏まえた正論で、議論に強い。明晰な頭脳と豊かな国際経験に加え、旧制高校の剣道全国大会制覇を果たした精神力、体力があった。

学生たちが本当に求めるのは、単に講義上手の先生や優秀な研究者ではなく、憧れと畏敬の対象となる「学者」ではなからうか。(理化学研究所理事長)